

広島大学 高等教育研究開発センター 大学論集
第48集 (2015年度) 2016年3月発行：31-48

新堀通也研究

—シンボリズムの形成と展開—

山野井 敦 徳

新堀通也研究

—シンボリズムの形成と展開—

山野井 敦 徳*

はじめに

2014年3月24日、新堀通也先生（広島大学名誉教授・武庫川女子大学名誉教授 1921-2014）は白鳥の歌を高らかに詠いつつ逝去された¹⁾。享年満92歳であった。1987年には教育社会学の発展への貢献によって紫綬褒章を受章されたのをはじめ数々の荣誉に浴された。本論集（第48集）は第5代センター長であられた新堀通也先生（以下、新堀と敬称等略称する）の追悼論文集として企画されており、編集委員会からの要請もあって、この機会に敢えて新堀研究を試みることにした。ささやかな本小論によって、われわれ後学者、とりわけ若手研究者にとっていろいろなインプリケーションが得られれば幸いである。

その第一には、教育学者、教育社会学者及び高等教育研究者としての知的巨人たる新堀の業績を整理することは、今後、それぞれの分野の在り方について何らかのたたき台を得ることができるかもしれない²⁾。現在の高等教育学会や教育社会学会における研究動向を眺めても、大会の研究課題として「後追い型の高等教育研究」とか「曲がり角にきた教育社会学」とか、関連学会における研究の方向性自体が不透明になっているといわざるを得ない³⁾。しかし、そのための何らかのヒントを得るためには高等教育研究者や教育社会学者としての新堀の生き様を正しく、かつ客観的に検証することが不可欠だろう。

第二には、新堀が死去し、いろいろな新堀研究のなされることが予想されるが、現在までの研究は注2)で紹介したように、まだ限定的である。学徒としての新堀は、第一論文と称することのできる「ルソー研究」（広島文理科大学教育学科卒業論文、1945年）から絶筆となった『新堀通也著作集 全七巻』（学術出版会、2015年；以下、『著作集』）までの70年にわたる全研学生活において完璧といえるほど、文字化された研究記録が留められている。それだけに新堀研究はきわめて興味深く、その文章記録から多くの成果が期待され、紡ぎだされる可能性があるが、本拙論は師弟関係を通じた内からの新堀研究を志向したものである。

第三には、現在の日本教育社会学会の会員は1,400人前後に達し、世界で最も多くの教育社会学者が活躍する一方、日本の教育社会学の開拓者の一人として新堀の実績どころか、名前すら知らない研究者が多くなった⁴⁾。最近の関連学会誌における新堀の研究業績に関する引用はきわめて少ない。斯学における最大の功労者の業績を後世に伝えることは、弟子の一人として不可欠な仕事となるだろう。それは同時に新堀の再評価を通してそのインプリケーションを模索する作業でもある。

*広島大学名誉教授／くらしき作陽大学名誉教授

以下、本拙論においては、「新堀通也研究—シンボリズムの形成と展開—」と題して論述するに際して、シンボリズムという用語について、その経緯や定義についてまず検討しておく必要がある。ここで看過してはならない点は、この用語がはじめて文献上に登場するのが、1982年度の『教育社会学』（第37集）の「書評」欄においてであったということである⁵⁾。しかし、実際には1971年度学会大会（明星大学）の新堀の課題研究発表「アカデミック・プロダクティビティの実証的研究」の分析資料⁶⁾をめぐってこの用語が登場することになる。すなわち、その大会の懇親会場において潮木守一（当時、名古屋大学助教授）と池田秀男（当時、広島大学助教授）との会話で、池田が新堀の研究スタイルに関して「シンボリズム」というタームを使用して潮木に解説した事実がある。それは書評に遡ること11年前である。新堀が教育社会学講座の正教授に着任する直前の出来事であった。池田がこの用語を使用し始めたのは、彼自身、シカゴ大学客員研究員としてシカゴ学派の洗礼を受けた1968年4月以降と推察される⁷⁾。最初の両者の会話においては、シンボリズムの定義や内実についてはどこにも言及されていない。ただ、両者による会話のコンテクストから推測されることは、この概念の意味は新堀の研究スタイルとして数量化による実証主義の徹底さを示唆していると思われる。しかし、本拙論において、筆者は学者としての人間学的新堀像をさらに総合的かつ多角的観点から検討するために、この「シンボリズム」の概念を「新堀通也の学問的態度及び研究スタイルを形成する人間学的総体」というもっとも広い意味で定義しておきたい。

筆者は、新堀が広島大学在職中、学部3年生から博士課程後期課程（単位取得退学）までに在籍しており、とくに後期課程においては学生の最高学年の立場から協同研究作業の責任を担っていた。ただ、この時期においては新堀の正教授昇進直前にあって講座全体の協同研究態勢は組めない立場にあった。そのため新堀指導を願った学生のみが主体的にその協同研究に参加したが、協同作業の部屋は新堀研究室において、いわば同居状態で実施された。それだけに、師弟関係がきわめて濃密な関係に置かれていた。したがって、本論では、師弟関係を通じた協同研究による内からの観察参加と解釈学を交えてシンボリズムの内実に接近する。同時に、各種の公表された資料に依拠してなるべく客観的な教育者、研究者及び社会の教育学的警告者としての新堀像に迫ってみたい。

以下では、次の節に従って展開する。すなわち、1. 学問への志、2. 学問的態度と生活、3. 研究テーマ、4. 研究方法とパブリケーション、そして最後に全体の総括について言及することとする。

1. 学問への志

吉田松陰の「至誠」に例を引くまでもなく、この世に生を受けた人の多くは、一般に将来への何らかの志をその高低にかかわらず抱くものである。立志伝中の人物の志は青雲の志と表現されることが多い。科学史にあっては学問への動機付けは「聖なる光 (holy) 説」と「社会的報酬 (social rewards) 説」から成立する。科学社会学は基本的には後者の立場に立つが、学問への志は両者に複雑に絡み合う。新堀は、寡黙な人柄であっただけに口承で学問への心情を語ることはそれほど多くはなかったが、他方において、饒舌ともいえるほど、学問への愛や情熱についての記録を残している。それらは、とくに三つの時期に集中しているように思われる。第一期は文学青年を志向して

いた学生時代から終戦前後の『歌集 戦中・戦後青春賦』（文芸社、2006年；以下、『歌集』）においてである⁸⁾。この時期の科学的社会化は学問の準備段階における学問への青雲の志を形成することに貢献している。第二期は新堀の広島大学教育学部教育社会学講座主任の正教授に昇進した際に研究室の私家版刷りで出版された『広島大学教育社会学研究室入門』（教育社会学研究室、1972年；以下、『研究室入門』）においてである。この時期は、上述したように「シンボリズム」という概念が次第に浸透し始め、新堀を中心とする教育社会学講座の協同研究体制へ向けての準備がなされ始めた。さらに第三期としては、晩年における武庫川女子大学教授としての時期に、これまでの学問生活を総括する一方、「白鳥の歌」を謳いながら学問への愛と情熱を注ぐ。こうした学問への志は絶筆となった『著作集』へと結晶した。このように、新堀の学問への志は青年期から晩年まで、70年の生涯にわたる学者生活において高く堅持されることとなる。

第一期の戦中・戦後の学生時代前後の学問への心情、その志や苦悩については、上記『歌集』を読み解くことによって接近できる。この歌集は彼の青年期における人生すべての事柄に関する心情を時に触れて吐露している。戦争と病による不出征、学問、旅、恋、将来に対するに夢と挫折や苦悩を有りのまま赤裸々に述べている。学齢期にあつては「秀才と言われしこともありしかな…」と謳うように、すでに周囲から秀才と認知されており、自らを秀才と表現している文言は生涯で唯一確認できる資料である⁹⁾。

多感な青春期にあつては、まぼろしの愛を数多く歌っているが、17歳で同級生との初の片恋を体験したようだ¹⁰⁾。第二次世界大戦という厳しい逆境ゆえに、あるいはだからこそ、学問や将来に対する夢と不安を高らかに数多く謳っている。高名な先学者、とりわけ哲学者、教育学者、音楽家、画家などを対象として短歌が謳われていると同時に、学友との学問の語り、書物に対する痛切な愛着などが、青年期の学問への志を構築している。

とくにこの時期、戦争体験と同時に、被爆体験が新堀の生涯の生き方に大きく影響することになる。当人の言によれば「原爆投下当日、当時、市内の東にあった東洋工業（現マツダ）で兵器を造っていた。亡くなった多くの友人は出勤する途中で原爆に巻き込まれた。私はといえば、滅多にない休みで下宿先にいて難を逃れた。下宿先も建物疎開で直前に市内中心部から転居したばかりであった。火傷は負ったが、爆心地近くの下宿先にいたら間違いなく即死であつたろう。…また、陸軍士官学校や海軍兵学校に飛び込んでいった有為な親友があいついで戦死したことを思うと、生き延びた私は人生を無駄に生きることは許されない、世の中のために役立たないといけないという念を強く抱くようになった」と述懐している¹¹⁾。後の神戸阪神大震災にも遭遇して「自分は生き残されている」というある種の運命論者になり、学問への志はいつそう強化された。

昭和21年、広島高等師範学校助教授を拝命し、学問を本格的に志す決意を固めたが、このときを契機に学問への志を数多く謳っている。それは『歌集』の戦後編第二章において、141首、23頁にわたり、生活詩全体の中でもっとも大きな割合を占めている¹²⁾。その中で「我が志す学問」を高らかに謳いあげる一方、「学問の道の険しさ」に直面して、「若き学徒の心のゆらぎ」と「溜め息」を深く体験するのである。このことは、学問への志が高ければ高いほど、心の揺らぎも深く、大きく、同時に学問への決意の強さを示唆しているのではあるまいか。

第二期の学問への心情は、新堀がそれまで構築されてきたと思われる理想とする「学問への心情」を次の世代である教育社会学講座の大学院博士課程・修士課程の学生に呼びかけるスタイルで語られている。しかし、この『研究室入門』は残念ながら、私家版であるため当時の大学院生向けに僅か30部前後しか印刷されていない。停年退職時に作成された『年譜』には確かに記録として留められているが、配布先も当時、数名の大学院在學生のみであって、現在ではその現物さえほとんど散逸している。それだけに、本冊子は新堀の学問への心情を読み解く上で貴重な資料となっている。

ところで、第二期前後におけるキャリアの重要な出来事は以下の通りである。末吉梯次教授の停年に伴って教育社会学講座は末吉教授・新堀助教授体制から新堀教授・片岡徳雄助教授体制に移行する。それと同時に、新堀の名声は教育学分野における『ルソー研究』、『教育愛の構造』を経て、学位論文『デュルケーム研究』を基盤に、学閥三部作を発表する一方、学生運動や教育社会学動向について世界の学問のセンターたる全米社会学関連雑誌への投稿やユネスコ IRE 雑誌の編者として国際的な視野で活躍していた。それと同時に、「科学社会学」や「日本の教育地図」に関する実証的研究に取り組み始めたところであった。したがって、新堀は科学社会学研究の発表の時期すでに世界的なレベルで功なり名をとげた段階にあったといえる。

こうした中、『研究室入門』においては、この時期における新堀の学問への心情が、自らが実践してきた学問像をベースに、次世代たる大学院生を鼓舞するための学問像とが合わせ鏡となって語られている。研究室は大学改革においてもっとも身近な生活の場であって、そこから取り組む必要が不可欠であると、指摘する。新堀の理想とする研究室の基本方針とは、すなわち、①学問への愛と献身（知的禁欲主義の徹底）、②学問第一主義風土の形成、③世界的視野の重視、④独創的研究への志向、⑤協同研究の重視、の五大スローガンである。そのスローガン実現のための具体的な技術、手段、方法や活動内容および教室の禁句が縷々述べられている。そして目指すべきは「研究者としてわれわれは学問の野心を最高度に持ちたいと思う。…教育社会学者の間で本研究室を無視することのできないだけの実質を生むことを、たとえ誇大妄想的野心といわれようとも目指したいと思う」と若い学徒を鼓舞したのである¹³⁾。

こうした新堀の大学院生への期待は、それまでの自ら実践してきた学問の実践であると同時に、その後の新堀の学問的实践そのもののスローガンでもあった。すなわち、学問的野心と学問への愛情は、生涯にわたって堅持され続けるのである。それは第三期における晩年の著作物を紐解いても理解される。当人を中心とした構想による臨床教育学研究科の10年の歩みを回顧する記念誌において、新堀は「白鳥の歌」という短編を寄稿している。「キェルケゴールも言う通り、人間は誰一人、死を免れることはできないが、その死は他の誰にも代わってもらわなくてもいいから、自ら引き受けなくてはならぬ。人生とは『死に至る病』に他ならず、人間はすべて『死に至る病の患者』だといってよい。死にさいして美しい『白鳥の歌』を歌える人は幸せだ」と述べ、現役最後の退職を意識すると同時に、学者として、これまでのエピローグ的総括を意識し始めている¹⁴⁾。事実、それ以降、『わが研究の軌跡—ある教育研究者の「自分史」—』（武庫川女子大学教育研究所、2005年；以下、『軌跡』）を代表として、新堀の学者生活の終活としての総括が一貫して行われる。『臨床教育学の体系と展開』（多賀出版、2002年）、『最近四半世紀における日本教育の動向』（2004年）、『教育研究

の60年一分析図表の提唱一』(2005年3月),『教育の潮流観測一最終講義資料』(2008年),『未曾有の『国難』に教育は応えられるか一「じひょう」と教育研究60年』(2012年;以下,『国難』),『著作集』(2014年)を出版する一方,筆者等の手配で広島市西区井口台の旧宅にあった私蔵図書「新堀未知夜荘」(2007年)と終の棲家となった神戸市での蔵書整理及び武庫川女子大学への寄贈(『新堀通也寄贈図書目録』武庫川女子大学教育研究所,2009年)を行っている。以上,新堀の青年期,壮年期及び晩年期における学問への志と心情を中心にここでは述べた。

2. 学問的態度と生活

以上,新堀自身の学問的志や弟子たちへ期待した基本的志は,「学問第一主義」に代表されるが,これは同時に,「知的禁欲主義」の裏返しでもある。かつその志の究極的目標は,世界的な視野における活躍である。こうした基本的態度と目標を達成するためには,何よりもまず,それを裏付けるための日常的な学問的態度や生活によって保証されたものでなければならないであろう。

例えば,こうした真摯な学問的態度や生活は,学界から高く評価されている研究者に共通に認められる不可欠な条件の一つであって,新堀とほぼ同世代の研究者においてもいくつかの具体例を認めることが可能である。例えば,資料の関係もあって身近な先人を挙げる。日本の各分野における浩瀚な数々の近代実業教育史を現在もなお追究されつつある三好信浩広島大学名誉教授は,同大学停年退職時に『私の万時簿』という広島大学最終講義録を残されているが,その学究的態度には一目置かざるを得ない¹⁵⁾。氏は恩師の一人であった,広瀬淡窓研究で有名な中島市三郎氏が生徒の指導として提唱し残された『万善簿』になぞらって上記の書名とされたという。日本人のいわば「一日一善」の積み重ねを,研究者として「一日X時間」という研究時間の積み重ねを記録したものである。この一日の正味何時間を研究に費やすかという記録から氏はいくつかの法則を見出している。すなわち,①一日の効率的に研究に費やせるまとまった研究時間は早朝がベストである。②史料の多くは東京にあるため,資料収集に費やす時間,すなわち,東京滞在中における史料蒐集のための効率的時間配分法工夫と実践。③最終的に,自らのペースでは1,500時間で一冊の著書をまとめて出版が可能である。この学究的態度の背景には,新堀の指摘する「研究第一主義」を見て取ることが可能だろう。

また同様な例は野地潤家広島大学名誉教授にも認められる。氏は広島大学停年退官の時点で単著31冊,編著40点,論文・論稿360編,研究発表108回という多産な方であったが,時間に関して実に几帳面な研究者であったことが窺われる¹⁶⁾。講義で朗読対象となる教材の朗読時間は,すべて自らが朗読し時間を測定済みで「何々君,何々を朗読してください。何分で読めます」といった具合であったという。自らの朗読時間記録として,『曽根崎心中』38分,『心中天の網島』48分,『国姓爺合戦』116分…長い所では『源氏物語』全文で38時間30分だという¹⁷⁾。氏は上記の業績記録以外にも研究授業目録(85回)なるものも作成されており,学校レベル,授業題目,年月曜日,クラス名,人数,授業時間数,配布学習資料枚数など実に丹念に記録している。現役時代の野地潤也家教授の教育実習に関する講話を学生時代に拝聴した経験があるが,この学生向けの講話は大学人になって

以来、〇〇〇回目の講話であると吐露されたが、講話の回数までナンバーリングされる徹底振りであった。

新堀教授もこうした学問的態度や生活には特筆されるものがあった。筆者は院生時代において先生の研究室での協同研究のため出入りを許されていた。弟子の一人として体験したことは、先生の研究室での平均的な一日の様子は次のごとくであった。通勤時のラッシュを避けて、郊外の広島電鉄宮島線の井口駅乗車、己斐駅下車して出口の郵便ポストに必ず昨夜したための郵便物の投函、そして徒歩約3分の西広島駅から霞町大学病院行きに乗車して、およそ30分かけて雑魚場町(広北口)で下車、大学北口から研究室までおよそ5分、計片道小一時間の道のりである。研究室での過ごし方は、来客や会議がない限り読書にほとんど費やされた。当時はJ、ベンデービット、R. K. マートン等の科学社会学論等の原著に英語辞典をほとんど紐解くことなく読破していた。学生が在室していても協同研究作業にかかわること以外にほとんど話をされることはなかった。まる一日会話は「食事」、「会議」、「帰ろう」の三言の印象しか残らないほど寡黙であった。つねに洋書文献解読と原稿書きに費やされた。先生と筆者は自宅が井口と五日市であったので同じ方角であったため一緒に帰宅することが多かった。車中では常に研究のあれこれを空想している風情であり、今から思えば、師と親しく接しえる折角の機会であったと思われるが、弟子が口を挟む雰囲気ではなかった。語りかければお邪魔以外の何物でもなかっただろう。ラッシュを避けて午後四時半過ぎには帰宅の途についた。バスが近づく前に必ず小銭を用意し、電車に乗り換え前も同様であった。徹底した合理的観念に基づいた生活であった。葉書や封書には必ずゴム印住所が前もって押されており、筆まめで一兩日中に郵送は処理され、上記の方法で投函された。原稿の構想でいっぱいであったのであろう。書斎は玄関右奥の座敷にあったが、在宅中はほとんど原稿執筆やノート作りに専念していたようだ。あまりにも原稿執筆に熱中されてなかなか寝付かれなかったようで、奥様のお話では習慣性のないドイツの睡眠薬を医者の方で常用されていたと伺ったことがある。「仕事はお断りすべきではない」ということを生活の身上としており、仕事が重複しない限り何でも引き受けた。国立大学協会の専門委員等で定期的に上京するときは、時間の節約のため夜行寝台列車を常用した。講演会も学会大会出張の前後を有効に利用することも少なくなかった。さらに驚くべきことは、学生課長、付属高等学校校長などの激職にあるときも、その経験自体を学問にする精神構造のたくましさであろう。この学問的しぶとさも留学中で得た指導から学び取ったと告白している¹⁸⁾。「学問第一主義」を日常生活から徹底した。しかも、この一貫した生活態度とリズムを生涯貫いた。研究者なら誰しも経験する山や谷(スランプ)のブレがほとんどないのは驚くべきことである。第一論文の『ルソー研究』から70年間の学究生活を貫かれたことは一般研究者の2倍の期間にわたる研究生生活であった。学生時代の胸の病気を例外に常に健康に留意していたと思われる。研究室では常に日本茶を愛用し、ほとんど偏食はなかった。好物は熟柿と雲丹それにセロリーを好んで食した。一時期、テレビの娯楽番組では「笑点」、「新婚さんいらっしゃい」を好み、山本リンダのファンで意外な面もあった。酒にも強く、ややヘビースモーカーであったが、奥様の配慮した手料理が功を奏した印象だ。事実、本人は「私は妻の手料理のひそかな隠れたファンだ」と後年述懐している¹⁹⁾。広島大学停年前後から風邪の際に高熱で肺炎気味になることが唯一の弱点であったが、芸術の世界で「長

命も実力」と称されるように、実に恵まれた長年の研究生活であったと判断される。このような健康、かつ長期の知的禁欲主義の生活であったからこそこのような多産な業績を残し得たのであろう。

3. 研究テーマ

しかし、学問への高邁な高い志と高潔な学級の態度は一流の研究者たるに要請される必要条件ではあるが必要にして十分なる条件とはいえない。科学社会学者、H. ズカーマンは、研究者にとって重要なことは、いかに研究するかよりも何を研究するかにある、といみじくも指摘する²⁰⁾。

新堀の詳細な学歴、職歴及び全研究業績については、自らの手になる広島大学教育学部教授停年時の『年譜』（私家版、1985年）、武庫川女子大学教育研究所教授退職時の『軌跡』（2005年）及び絶筆となった『著作集』においてすべてが整理されており、最近では、さらに新堀通也先生追悼集刊行委員会の編集になる『新堀通也 その仕事』（東信堂、2015年；以下、『仕事』）が出版されている。いずれにせよ、新堀自身の手になる文献に基づいて和洋語で出版された著書（単著・編著等）、訳本（監訳・編訳・訳本等）、論文（学会誌・機関雑誌等）、書評、辞典、マスコミ（新聞・商業雑誌）向けなどを単純に総計してみると、おおよその総数を把握できるかも知れない。広島大学教育学部教授の停年退職そして武庫川女子大学教育研究所教授の退職時（同大学では文字通りの終身雇用契約であった）に整理された『年譜』等の研究記録から総計すると、およそ1,700本（シリーズ物は1本と計算）に及ぶが、表1は年間ごとの出版点数を整理したものである。『軌跡』の記録は同大研究所の退職時（2005年）で終了しているの、それ以降、10年間の出版物は含まれていない。生涯出版実数値はさらに増加し、2,000点を超える可能性がある。

表1 年間出版点数の推移

西 暦	点数	西 暦	点数	西 暦	点数	西 暦	点数	西 暦	点数	西 暦	点数
1950年	2(-)	1960年	7(-)	1971年	39(6)	1980年	45(4)	1990年	49(-)	2000年	44(1)
1951年	1(-)	1961年	3(2)	1972年	22(1)	1981年	45(4)	1991年	50(-)	2001年	26(1)
1952年	7(1)	1962年	10(1)	1973年	42(5)	1982年	56(2)	1992年	41(1)	2002年	25(2)
1953年	1(-)	1963年	17(-)	1974年	44(3)	1983年	55(2)	1993年	44(4)	2003年	15(-)
1954年	6(1)	1964年	25(3)	1975年	32(2)	1984年	50(4)	1994年	39(1)	2004年	26(-)
1955年	3(1)	1965年	22(4)	1976年	39(4)	1985年	61(9)	1995年	47(1)		
1956年	3(1)	1966年	30(3)	1977年	45(3)	1986年	62(3)	1996年	37(2)		
1957年	3(-)	1967年	22(3)	1978年	42(5)	1987年	56(2)	1997年	33(2)		
1958年	5(1)	1968年	31(1)	1979年	42(1)	1988年	51(1)	1998年	28(-)	2014年	-1
1959年	6(-)	1969年	47(4)	1979年	32(3)	1989年	47(-)	1999年	28(1)	総計	1,690

注：①『年譜』『軌跡』に収録されたものを対象にした総点数。なお、生年は1921年。

②（ ）内は単・共・編著・翻訳書及び報告書で内数。

③シリーズものは1点として積算（ただし年度を超えるものは項目ごと1点とした）。

④その他には、卒業論文1点、「1949年」は5点ほど、ルソー研究を中心とした業績がある。

しかし、量的な出版点数の把握のみでは質的な流れを整理して全体像を把握することが困難であろう。新堀の生涯にわたる全研究は極めて多産で広範囲にわたるが、理解しやすくするために、そのテーマを通覧して系統化して整理すると、表2のように五つの系譜に要約できる。

その研究成果の特徴をもっとも端的に表現すれば、①教育学者を出自とする教育社会学者としての第一世代の代表であること、②教育社会学者として基礎理論研究を踏まえていること、③それを踏まえて、教育社会学的実証研究を推進し、中でも学界において高等教育研究にもっとも早くから手がけ、学界の先端研究をリードし、次々と新領域を開拓したこと、③並行して、教育の啓蒙・批評・警告活動を推進していること、④生涯現役者としての研究者モデルの実践者であったこと、⑤最終的なまとめとしての『著作集』に要約できるだろう。以下では、テーマの選択と設定に関するより詳細な分析を加えることとする。教育社会学者としての新堀は、教育社会学の基礎理論として、E. デュルケムをテーマとしている。これは、東京大学の社会学者出身の清水義弘と同様であるが、教育社会学の学会創設時においては、新しい学問分野あればあるほどその出自を追究し、学問としての正当性を確立する必要があった。東京教育大学の馬場四郎は、T. パースンズに、京都大学の姫岡勤は文化人類学に、それぞれ基礎理論を求めた。こうした海外からの社会学理論研究のわが国への導入は、輸入学問の伝統から現在なお継続中であるが、こうした中であって、新堀らのデュルケム理論の導入はもっとも正統的な立場であったといえるだろう。

表2 新堀通世の研究系譜一覧

研究系譜	研究課題
I. 教育学研究の系譜	ルソー研究, 教育愛の研究, 特殊教育論等
II. 理論研究の系譜	デュルケム研究, 教育社会学論 (含む, 外国語), 教育社会学テキスト
III. 実証研究の系譜	大学進学, 学閥研究, 学生運動研究, 大学教授市場研究, 学歴研究, 科学(学問)社会学, 生涯教育(学習)研究, 都道府県別教育比較研究, 学問業績評価(エボニミー)研究, 知日家研究, 教育病理研究, 大学評価研究, 夜間大学院研究, 臨床教育学研究等
IV. 評論的著作の系譜	『殺し文句の研究』, 『見て見ぬふり研究』, ポリティカル・コレクトネス, 教育ポピュリズム, 『国難』等
V. まとめ	『著作集』

清水と新堀の実証的研究の展開はじつに興味深い。両者は共に当時主流の一つになっていたデュルケム研究を出発点として、「試験」や「大学進学」などを最初に手がけている。しかしテーマは似通っているものの、その接近法や研究の展開の仕方において両者はきわめて対照的である。この段階では新堀は社会学の社会移動理論を背景に了解的方法によって理論的に展開している。それに対して、清水は実に多角的な視点から受験雑誌や進学に関する現場のデータ分析を駆使して実証している²¹⁾。こうした新堀の研究が、そのテーマや接近法において大きく豹変し転回するのはアメリカ留学を契機としてである。1959年のフルブライトンとしてのシカゴ大学留学によって、そのときの指導者C.A. アンダーソン教授(比較教育学者)等によって「身の回りの研究をし」と徹底的に指導される²²⁾。それを具体的に理論化するとすれば次の通りであろう。

それらは表3の基本的枠組みの一端にも示されるが、四つのイズムとして要約できる。新堀の教育学研究の系譜やデュルケム、ハヴィーガースト、ブリムなど理論研究は欧米などの理論的、文献的な接近法が主流であった。特にこうした理論研究によって、すでに学問的価値(アカデミズム)があることを第一に志向していたが、留学によってさらに強化されてきた。そして、第二のイズムは、アメリカ、とりわけシカゴ大学留学によって特に影響を受けていると判断される。すなわち、

シカゴ大学で活躍したJ. デューイのプラグマティズム思想の影響を間接的にはあるが、強く受けていると推定される。新堀の研究テーマの選択において接近法と共に社会的な有用性を強く主張していることにこのことは認められるだろう²³⁾。新堀は時代時代の先鋭的な問題に関して誰よりも先んじた唾付け宣言を新聞・雑誌などのジャーナルやマスコミ界に対して試みるよう心がけた。それは、単なる売名行為のためではなく、社会からの注目を惹きつけ懸案となった時代の問題を解決するためのプラグマティズム的精神があったからであろう。第三のイズムは、シカゴ学派の中核にあったアメリカ社会学や比較教育学における実証主義 (positivism) の影響である。それ故に実証のための身近さや研究の容易さが問われるのである。新堀の従来から接近してきたテーマは、教育学における哲学的考察、あるいはその後のデュルケームによる社会学の理論研究、さらには教育社会学における欧米の文献を通じた理論研究であった。留学前の新堀の言を借りれば「私の社会学はアームチェア・ソシオロジーだからね」という自嘲的表現が当時の研究テーマや方法の立場を端的に表明している²⁴⁾。

表3 実証のための研究の基本的枠組み

Accessibility (方法)	物理的接近 (身近さ)
	方法的接近 (研究法)
Achievability (目的)	学問的価値 (アカデミズム)
	実践的価値 (プラグマティズム・ヒューマニズム)

留学後は各種の実証研究を次々と展開した。それらの実証研究のテーマこそ第四の留学中に感得した最大の研究テーマに関するイズム、すなわち、ネポティズム (nepotism) 的立場であろう。このネポティズムに関する内容と由来については筆者がすでに『その仕事』において指摘した²⁵⁾。このネポティズムのそもそもの発想は、あの大学教授市場をしたためたT. キャプロー & R. J. マッギーの名著に源流があることはすでに証拠を提示しつつ紹介した (新堀通也蔵書, No.2783 ; T.Caplow & R. J.MacGee, The Academic Marketplace, 1960)。このネポティズムというキーワードの意味は、現在ではアメリカの大学においてインブリーディング (学閥) を回避するための具体策として、何親等以内の親族の採用を禁止した学内規則へと法制化されてきたものである。新堀は、このネポティズムの概念を普遍化して、M. ヤングのメリトクラシー (実力主義) の反対概念に位置づけ、そのネポティズム的日本文化を対象とした研究テーマを次々と開拓したのである。京都学派を代表する教育社会学者園田英弘が「逆欠如」理論を展開して、「花見」「忘年会」「みやこ」など、「日本にあるものは世界にあるか」として国際日本文化研究センターの研究テーマを方向付けたが、新堀はこの京都学派よりはるか以前に逆欠如理論をネポティズム社会学において身近なテーマを次々と構想していたのである。そうした新堀の研究テーマの着想には、短歌的な直感の一言による着眼大局のひらめきがある。後年、「まあ〜、なんと言うかね。この浮世にうごめくあれこれすべてのことが研究の対象になるねえ」と日頃述懐していた。その背景には、新聞、社会問題、象徴的な出来事等を通じて社会の表裏を観察するネポティズム的精神がしっかり中核にあってこそ、各種

のテーマを選択し設定し得たのであろう。晩年のジャーナル界で訴えたキャッチフレーズの豊富さや奇想天外さには目を見張るものがある。「ポリティカル・コレクトネス」や「教育ポピュリズム」という概念にとりわけこだわった背景には新堀ならではの天才的な感性と正義感がある。例えば、教育ポピュリズムに敏感に反応する原因には、新堀の学生運動を契機とした社会の学生運動に関する同情や風潮、それを助長してきた上滑りな戦後民主主義教育に対して許しがたい怒りの念を感じ取る苦い体験が反映していると思われる。いずれにせよ、こうした言語を巧みに操りながら教育社会学という世俗的な学問テーマを紡ぎだしていった手法には、後学者として学ぶべき点が多々あるのではあるまいか。

他方、上述した新堀自身が自嘲的に吐露してはいるが、よい意味での「アームチェア・ソシオロジスト」としての才能は、表2のIVの評論的著作において如何なく発揮され続けた。詳細は表4の通りであるが、新堀の評論の多くは、単なるエッセイではないものが多い。例えば、朝日新聞に発表された「学生の権威主義と講座制」（1969年3月11日）における文化人類学の移民研究から借用した「三世代反応」理論の応用はその典型であろう。「見て見ぬふり」「殺し文句の研究」など、実際にはⅢの実証研究のように、具体的に仮説を数字でもって検証するのははなはだ困難である。だからこそ、実証教育社会学者としてよりも教養主義者的な「アームチェア・ソシオロジスト」として、より空想的により広くより深く奇想天外な造語、慣用句、流行語、ことわざ、社会学や教育学の理論や用語を縦横無尽に操作できたのであろう。「新堀未知夜荘」蔵書から自明なことであるが²⁶⁾、その膨大な読書歴に裏付けられた知的背景を基盤に、ネポティズム的精神による研究テーマへの応用はより広がりを見せたように筆者は思う。

4. 研究の方法とパブリケーション

以上、新堀の教育社会学における実証研究のテーマ選択と設定に関する背景を分析したが、同様に新堀の研究方法やパブリケーションに関する研究スタイルにもある一定の法則を業績から読み解くことができる。

新堀の選択する研究テーマは、若干の例外はあるが、常に新しく前人未到（未踏）のもので独占されている。上記に研究テーマの唾付け宣言を好んだと指摘した。新堀のパブリケーションスタイルとはその字義通り公にすることであって、最初に新聞や雑誌などマスコミ界に、しかもセンセーショナルに訴える手法を採っている。出発点は、「日本の大学教授市場—その「自給率」と「系列率」—」は当時のマスコミ界の進歩的雑誌であった「朝日ジャーナル」（1963年 Vol.5 No.47, 11月24日）に華々しく登場した²⁷⁾。当時、朝日新聞「論壇時評」（同年11月26日）を担当していた都留重人は「常識と知られている事ながらこれを統計化することによって問題の所在をいっそう鮮明にし、閉鎖社会に窓を開ける異色の労作」と評する一方²⁸⁾、永井道雄は『日本の大学』の中でこの研究を「ユニークな業績」と高く評価した²⁹⁾。当時の学界やマスコミ界の注目の的であった。最新の領域開拓を意識し、マスコミ界にセンセーショナルに公表する手法は新堀の狙い通りであったといえる。こうした例を代表として、表2の教育社会学に関する各実証研究の多くが、表4に整理したように、

各ジャーナル界に発表された。マスコミ界，学会での口頭発表そして論文発表，最終的には単行本の著書としてパブリケーションされたと方式化できる。

表4 ジャーナル界での発表テーマの類型と寄稿点数

種 類	表2の研究課題関連	表2以外の教育課題関連
五大新聞	17	8
その他新聞	7	16
一般週刊誌	3	4
月刊雑誌	112	268
団体機関雑誌	49	61

注：①広島大学停年までを対象（1950-1985年）。②再録・書評・シンポ・座談会・学会誌論文等は除く。③五大新聞とは朝日・読売・毎日・サンケイ・日経を含む。④正確には表2のⅠ-Ⅲまでを研究課題関連テーマとした。

そしてさらに研究成果の少なからずの業績が辞書化・教科書化された。これらの業績にはそれだけ独創性やオリジナリティの高いものが多かったという証明で文字通り新たな知識を創出したのであろう。いずれにしても，人生後半期にあつては学界と同時にジャーナル界への盟主として大幅な進出が認められる。

表5 パブリケーションの主要メディアごとの寄稿点数

一般新聞	一般週刊誌	教育雑誌等	特集連載企画したもの
日経新聞 11	朝日ジャーナル 4	風土 54	週刊教育プロ
読売新聞 10	週刊ポスト 2	児童心理 48	朝日新聞
朝日新聞 9	サンデー毎日 1	教育ジャーナル 42	サンケイ（正論）
中国新聞 9	週刊サンケイ 1	総合教育技術 32	中国新聞
聖教新聞（公明新聞）8		学校運営研究 25	日本教育新聞
サンケイ 6		体育科教育 20	教育新聞
毎日新聞 4		日本の教育 19	日本教育
ほか多数		医学と教育 18	週刊教育史料
		日本の教育 18	武道
		悠 17	言論人
		学校教育 16	進研ニュース
		日本教育新聞 14	内外教育
		家庭と教育 12	総合教育技術
		現代教育科学 11	学校教育運営
		日本教育 10	学校運営研究
		ほか多数	学研「教育技法」
			啓林
			社会教育
			教職研修
			れいろう（広池学園）
			ほか多数

注：①『年譜』『軌跡』に収録されたものすべてを対象にした（1950-2004年）。学会誌等の学術雑誌論文及び書評・シンポ・座談会等は除く。

②数字の単位は寄稿点数。シリーズものは1寄稿点数として積算。

表5に示すように、全国的な一般新聞や各種ジャーナルのほか、「厚生補導」・「文部時報」・「授業研究」など数多くの特定マスメディアとの太いパイプを通して社会全体に教育界全般の諸問題を問題提起し社会への警鐘を喚起する一方、週刊教育プロ「じひょう」に認められるごとく、26年にわたって連載シリーズを組んでいる。そのタイトル『未曾有の『国難』に教育は応えられるかー「じひょう」と教育研究60年』として編集された。本書の究極的な狙は、新堀は自らの生涯を振り返りつつ、現代のような四面楚歌の国家社会状況に直面しているからこそ、社会の人間的営為の根幹を形成する教育の力や未来への若者の教育に大なる期待を抱いていたのではあるまいか。

パブリケーションの仕方に関してさらにいえば、業績発表の演出効果として、単行本化された業績の中でも、初版本、再版本、著作集と3回にわたって出版された三重奏以上の多重奏的にパブリケーションされた業績も少なくない。とくに「教育における愛の問題」（初版タイトル）や「ルソー研究」（同）など教育学の重要な業績はタイトルを変化させて、三回以上のパブリケーションを試みている。この理由の一端は、新堀が教育学出身の第一世代の教育社会学者であったことと無縁ではない。この世代の特権は教育学者の顔と教育社会学者の顔を持つが、新堀ほど両者の顔を効果的に演出した教育社会学者は他に例を見ない。教育学の業績を再出版することによって教育社会学という専門領域を超えてより高いキャリアの高みから教育を論じている。このことは同時に教育に関する大御所としての地位の再構成に貢献してきたと判断される。教育学への回帰は単なるブーメラン現象ではなく、いわば意識化された正の螺旋階段的キャリア形成の構築を意図している。こうしたキャリア形成の展開の仕方は新堀自身がパブリケーションスタイルを通じて編み出したキャリア形成のあり方であって、この点においても新堀の独自性を垣間見ることができる。第一世代やその他の世代の研究者らのキャリア形成と新堀のそれとを比較してみれば、このことは容易に理解される。最終的に新堀は自らの自己規定を『軌跡』のタイトルに記すように「教育社会学者」としてではなく、「教育研究者」として、自らを規定しているのである。

同様に、研究の仕方（方法論）においてもある一定の法則が見て取れる。個人研究か協同研究か、といった研究方法については研究テーマによって意識的に選択している。再度、表2の業績の系統にしたがえば、ⅠとⅡさらにⅣの研究テーマ領域では個人研究が圧倒的に多い。それに対して、教育社会学における実証的系譜の領域では協同研究という協同研究態勢が徹底している。それぞれの研究テーマ領域のよって立つ学問の社会的背景を分析すれば、新堀がきわめて合理的判断をしていることが容易に察知される。教育学研究や教育社会学の理論研究はアームチェア・ソシオロジーで遂行されるので文献中心の個人作業こそが新堀の能力を最大限発揮できる。これに対して教育社会学の実証研究の系譜は、広範で複雑な作業を出発点として、学会での口頭発表、論文作成、著書に纏め上げるに至る作業まで考えると、大学院生までも巻き込む協同研究方式が短期でかつ最大限の成果を期待できる。評論研究の背景にはマスコミ界との関係が、実証的研究では学生や研究室運営と連動しており、研究テーマを遂行する上での社会的バックボーンは大きく異なる。とりわけ、単著、共著あるいは編著といった出版形態の相違も、研究の仕方と研究テーマが微妙に交差した結果を反映している。新堀はそれを意識して最大限に利用している。研究テーマと研究方法の巧みな使い分けによって新堀の学問的生産性は飛躍的に増大したと判断できる。

こうした教育社会学の実証研究による協同作業は、大学研究テーマの最初の出発点である『大学進学の問題』（1955年）の当初からはじまっている。「新堀未知夜荘」蔵書（No.2114）の本書が手元にあるが、たしかに表紙は新堀通也著になってはいるが、目次内容は1章新堀、2章片岡徳雄（当時、院生）、3章森孝子（同上）から構成されている。学会の口頭発表からパブリケーションに至るまで協同研究として推進され、同時に、この研究過程は多くの弟子を養成する方法であって、広島大学教育社会学講座の協同研究態勢は研究の生産方式であると共に研究者の養成システムでもあった。この協同研究方式は決して新堀の専売特許ではなく、末吉梯次教授からの教育社会学研究室の伝統でもあった。教育社会学会の発表形式も広島大学方式の影響もあって協同研究方式が急増して行ったが、現在のように、論文博士から課程博士方式に切り替わった1990年代を境に急激に衰退し、学生の個人研究が主流となった。それと共に大学ごとの研究室の学風も失われてきたのは当然の成り行きといえる。

結語

以上、本拙論においては、「新堀通也研究—シンボリズムの形成と展開」と題して、筆者なりのシンボリズムの定義とその内実に迫った。新堀通也は単なる教育社会学者の範囲に収まりきれない、「教育とは何か」という教育社会学者としての問いと「教育はどうあるべきか」という教育学者としての哲学的な問いを常に追究した教育社会学者であり同時に教育学者としての巨人であったと結論付けることができる。ここでは、弟子から見た内からのシンボリズムの謎解きに迫った。「何故あれだけの学問的生産性をなし得たのか」「何のために研究するのか」「教育社会学（高等教育研究）をどのように方向づけたのか」などなど、本小論はその一端を解明しようと試みた。当事者の詳細な学歴、職歴及び全研究業績については、新堀自身の手になる広島大学教育学部教授停年時の『年譜』（私家版、1985）武庫川女子大学教育研究所教授退職時の『軌跡』（2005年）及び絶筆となった『著作集』においてすべてが整理されているし、新堀通也先生追悼集刊行委員会編『仕事』が出版されている。詳細を理解したい方は上記の文献をひもといていただきたい。

筆者が広島大学高等教育研究開発センター「コリーグ」（第48号、2015年）における追悼文と本小論で整理したように、新堀の学問的な貢献は以下の諸点に集約されるだろう³⁰。第一には、表2の研究テーマを整理した系譜からいえば、IIの領域における教育社会学における国の内外にわたる理論的貢献であろう。その代表的業績はユネスコ教育研究所の紀要においてわが国の動向を位置づけると同時に、編者として世界の教育社会学の動向について編集した。その成果は主要国言語に翻訳され各国から高く評価された。第二には、教育社会学実証研究における世界的みてもユニークな貢献である。いずれのテーマも新領域を開拓したもので、学生運動や学閥研究を代表として世界的な視野で世界をリードした研究が少なくない³¹。広島大学高等教育研究開発センターとの関連で述べるならば、新堀の大学進学並びに学歴研究学閥、大学教授市場、科学（人文・社会科学を含めた学問の）社会学及び知自家研究、夜間大学院研究等は、わが国大学研究の萌芽期を主導した研究であると同時に、大学研究の最高峰を形成するものであって後世まで高く評価されるに相違ない。ま

た、これらの協同研究を通じて多くの後継者（弟子）を育成すると同時に、個別大学としての広島大学を超えた教育社会学会全体の研究人脈（とりわけ、大学研究の領域に多くの人材を惹きつけた）とその研究動向に大きな影響をもたらした。第三には、生涯教育学習（社会教育）における貢献である。わが国の生涯教育導入者の最大の貢献者の一人であると同時に、生涯教育機関としての夜間大学院の研究を公表し、さらに教育臨床学研究科博士課程を全国に先駆けて制度化したことは特筆に値する。とりわけ、生涯現役を貫く研究者のモデル体現者として、ルソー研究（広島大学文理科大学教育学科卒論）以来、70年間、教育を模索する研究者、あるいは研究者養成者として、人生のほとんどすべてと言って良いほどこれらのために捧げた巨人の生涯であったといえる。最後の第4として、教育に関する一般社会への警世・警鐘・警告である。これらのタイトルを通して憂国の士としての訴えの背景には、教育に関する個人や社会、国家の「見て見ぬふり」（ある意味でのポピュリズム）を克服するための真の教育のあり方をめぐる大いなる期待があったように思われる。その究極的な一つの教育のあり方として「教師が研究姿勢や教授を通じて教え子に人格的に影響を及ぼすこと」こそ教育の本質であると新堀は訴えている³²⁾。

以上、「新堀通也研究—シンボリズムの形成と展開—」と題して新堀像の一端を検証した。新堀研究の質的な貢献と評価の検証はさらに多角的な角度から継続されるべきであろう。しかし、さらに考えて見なければならない点は、こうした先人のパラダイムのモデルがこれからの世代の教育社会学者の目標モデルであるとは必ずしも限らない。教育社会学者の科学的社会化のあり方は第一世代のおかれた環境とは激変している。現代の高度化・専門分化した教育社会学にあつては早期の課程博士号の取得を義務付けられ、研究の方法論・接近法や研究スタイルも複雑化している。第一世代とは異なって未開拓の分野はほとんどなく、先行研究の蓄積も膨大になりつつある。しかし、そうした困難な状況にあるからこそシンボリズムの精神から何らかのインプリケーションを学び取っていただくなら筆者にとってこれ以上に幸いなことはないだろう。

【注】

- 1) 新堀通也「白鳥の歌」武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科編『臨床教育学研究科10年の歩み』2004年、74-76頁。新堀は、晩年、「白鳥の歌」と題する短文をこの中で残している。自らの人生の総括として、あるいは後世への継承として文章化したものであろう。いろいろな意味で教聖ペスタロッチへの回帰と人生の究極的完成を意識している。
- 2) これまで、新堀研究に関する文献は、新堀通也先生追悼集刊行委員会編『新堀通也 その仕事』東信堂、2015年がある。追悼文としては、加野芳正「新堀通也先生のご逝去を悼む」日本教育社会学会ブリテン、160号、2014年と拙著「新堀通也先生のご逝去を悼む」広島大学高等教育研究開発センター「コリーグ」48号、2015年などがある。
- 3) 例えば、日本高等教育学会における大会では、課題研究として研究のあり方に関するテーマがいくつか設定されている。また日本教育社会学会ではこの何年間か「まがり角の教育社会学」というテーマの課題研究が設定されている（Bulletin, No.160, 2014年5月号）。

- 4) 例えば、最新の『教育社会学研究』（第96集，2015年）における諸論文の本文や引用論文を一瞥しても新堀に関する言及はほとんど確認できない。当人にとっても「最近，若い人が尊敬してくれなくなった」と吐露されていたようだ（有本章「新堀先生を偲んで」新堀通也先生追悼集刊行委員会編『同上書』206頁）。
- 5) 「シンボリズム」という標語が文献上において登場するのは『教育社会学研究』（第37集，1982年，164頁）書評欄中に引用された，潮木守一（当時，名古屋大学助教授）と池田秀男（当時，広島大学助教授）との会話において，池田がはじめて使用している。しかし，シンボリズムの定義や内実については言及されていないが，文脈から推測されることは，その概念は，新堀の「数量化による実証主義の徹底さ」を中核にした学問的姿勢を示唆していると思われる。
- 6) 当日の発表は，科学社会的分析による「アカデミック・プロダクティビティ」に関するわが国初めての試みであった。データ分析は当時大学院博士課程であった山野井敦徳，西根和雄及び修士課程の成瀬玲子が主として担当した。当時は新堀が助教授時代で講座全体の協同研究体制は組めなかった。対象とした資料は次の通りである。日本の代表的教育社会学テキストの国別・研究者別・分野別論文引用分析，市販教育学一般雑誌の年代別テーマ別分析，日本出版ニュース雑誌に基づく学問的生産性に関する年度別・出版形態別分析，日本教育社会学大会プログラムの司会者・発表者の属性分析，国際科学人名事典（Who's Who in Science, 1968）及び主要5カ国（英米独仏日）百科辞典に基づく科学者に関する属性分析などなど，大型模造紙で50枚以上の発表で潮木教授は質量ともに衝撃的な印象を受けたと回顧している。新堀の指示で発表後のデータ無断引用等を恐れて，配布資料として記録に残っていないのは残念であった。発表概要については，『日本教育社会学会第23回大会 発表要旨収録』（明星大学，1971年）を参照されたい。これらのデータは，新堀通也著「情報化時代における教育の課題」木原健太郎編『情報化時代と教育』明治図書，1972年，7-33頁，新堀通也編『学者の世界』福村出版，1981年，全233頁，同上著『日本の学界』日本経済新聞社，1978年，全187頁，同上著「アカデミック・プロダクティビティの研究」広島大学大学教育研究センター編『大学論集』第1集，1973年，11-19頁，等において分散して掲載されている。
- 7) 池田秀男『年譜・著作目録』私家版，1992年，全39頁。
- 8) 新堀通也『歌集 戦中・戦後青春賦』文芸社，2006年，全237頁。
- 9) 新堀通也『同上書』2006年，94-103頁。
- 10) 新堀通也『同上書』2006年，101頁。
- 11) 新堀通也「私の写真館」『正論』2005年，392号，巻頭グラビア，1-7頁。
- 12) 新堀通也『同上書』文芸社，2006年，168-189頁。
- 13) 新堀通也『広島大学教育社会学研究室入門』私家版，1972年，全11頁。
- 14) 新堀通也「白鳥の歌」武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科編『臨床教育学研究科10年の歩み』2004年，74-76頁。
- 15) 三好信浩『私の万時簿—広島大学最終講義』風間書房，平成8年，全168頁。
- 16) 野地潤家先生御退官記念事業会（大槻和夫編）『野地潤家先生に学びて』溪水社，昭和59年，

全564頁。

- 17) 光葉会『国語教育研究会』第26号, 野地潤家先生還暦特集号, 昭和56年。
- 18) 新堀通也『同上書』392号, 2005年。
- 19) 新堀通也『同上書』392号, 2005年。
- 20) H. ズカーマン (金子務監訳)『科学エリート』玉川大学出版部, 1980年。
- 21) ①清水義弘『試験』岩波新書, 1957年 (『清水義弘著作選集』第一法規, 1978年, 第三巻収録, 3-133頁)。②新堀通也『大学進学の問題—光風教育ライブラリー11』光風出版, 昭和30年, 全91頁。
- 22) 新堀通也『同上書』392号, 2005年。
- 23) 拙著「学生運動」の「基本的研究枠組み」新堀通也先生追悼集刊行委員会『同上書』東信堂, 2015年, 106-108頁。
- 24) 森楸のフェースブック (2014年2月27日投稿) から引用した。
- 25) 新堀通也先生追悼集刊行委員会編『同上書』東信堂, 2015年, 109頁。
- 26) 拙著「新堀未知夜荘について—すべてはそこから—」新堀通也先生追悼集刊行委員会編『同上書』東信堂, 2015年, 211-216頁。
- 27) 朝日新聞社「朝日ジャーナル」1963年, Vol.5 No.47, 11月24日号。同雑誌とははじめての関係で, それ以降, 3回にわたって投稿している。
- 28) 朝日新聞社「朝日新聞」(同年11月26日) 都留重人「論壇時評」(下)。
- 29) 永井道雄『日本の大学』中公新書, 1965年, 177頁。
- 30) 拙著「新堀通也先生のご逝去を悼む」広島大学高等教育研究開発センター「コリーグ」48号, 2015年5月, 10-11頁。
- 31) 学生運動に関する詳しい評論に関しては, 新堀通也先生追悼集刊行委員会編『同上書』東信堂, 2015年, 「学生運動」(友田泰正・山野井敦徳・山崎博敏) の節を参照されたい。
- 32) 新堀通也『同上書』392号, 2005年。

【謝辞】

新堀通也先生のご高弟の一人である森楸広島大学名誉教授から新堀先生に関するいくつかの重要なご示唆を戴いた。同様に, 野地潤家広島大学名誉教授に関してもご高弟の一人である奥田邦男広島大学名誉教授のご指導を戴いた。さらに同僚の河野員博県立広島大学名誉教授には本稿をご通読していただき, いろいろとご意見を戴いた。各位には記して御礼申し上げたい。